

方言談話における計量国語学的類型論

— 四国・九州・沖縄地方 —

荒 則 子

1. はじめに

久木田（1990）では、東京方言と関西方言には談話展開に明らかな違いが認められることを提示した。東京方言（主観直情型）は客観的状况に感情を込めた主観的な文を交えて進める展開方法であり、「ダカラ」「ホラ」「ネッ」の使用が特徴である。また、関西方言（客観説明累加型）は、接続詞により畳みかけるように話す展開方法であり、「ソシテ」「ソレデ」類の頻用が特徴である。

まず初めに、久木田（前掲論文）による解釈から2つの疑問点が浮かび上がった。①「東京方言では接続詞に「ダカラ」「ホラ」「ネッ」のような感情を込めた文を交えて説明を進める展開、関西方言では順接の接続詞「ソレデ」「ソシテ」類の頻用で客観説明を累加していく展開となっており、展開方法には地域性が認められる。」（久木田前掲論文）とあるが、関西方言では東京方言のように主観を込めた文を交えて説明することはないのか。また、順接の接続詞「ソレデ」「ソシテ」類とされている「ヘテ」や「ヘター」には、主観の意味も含まれていないのか。②「東京方言と関西方言の談話展開の違いは生活習慣の違いである。歴史も古く、お互いの生活をよく知っている関西人同士では、状況説明の中からそのような環境にある話者の立場や気持ちを理解することが出来、それが出来ることを『嗜み』とする風潮がある。それに対して他所者も多い東京では、直接的に言わなければ理解してもらえないため、積極的に自己主張するもの」（久木田前掲論文）と解釈している。この解釈に従えば、人の出入りの少ない地域では関西型になり、人の出入りの激しい都市では東京型になるのではないのか。また、関西の中でも京都、大阪、神戸などの大都市では人の流通も激しいので、大都市と農村では同じ府県であっても談話展開に違いがあるのではないのか。

次に、久木田（前掲論文）に対する疑問点を基に仮説を立てた。①関西方言の「ヘター」や「ヘテ」を接続詞「それで」「それから」類と解釈したならば、「ヘター」「ヘ

テ」は東京方言の「だからね」といった感情を込めた接続詞の機能を果たしていないことになる。②歴史も古くお互いをよく理解している地域の人が客観説明累加型をとる。また、よそ者の多い相手のことをあまり知らない者同士の会話が主観直情型をとる。この前提に立てば、よそ者の出入りが極めて少なく、地元の人同士の談話であれば、どの地域においても客観説明累加型をとり、人の出入りが激しい都市に住むよそ者同士の談話は、主観直情型をとることになる。

本研究では、久木田（前掲論文）による談話展開方法の違いについて、そこから見出された疑問点を基に談話展開分析法をさらに詳細化することで、久木田（前掲論文）では取り上げられなかった四国・九州・沖縄地方における方言談話展開方法を明らかにしながら、その地域差が生ずるメカニズムを推定することが目的である。

2. 分析方法

①久木田（前掲論文）に見られる東京型（主観直情型）と関西型（客観説明累加型）の2つの型の認定に従い、実際に東京型は談話全体の何%が主観直情表現を占めるのか、また、関西型（客観説明累加型）も同様に客観説明累加に関わる表現の割合を分析する。^(注)

②四国・九州・沖縄地方における場面設定をしていない対話を基に、久木田（前掲論文）の方法に基づき、東京型と関西型のどちらにあてはまるのか、また主観直情表現、客観説明累加に関わる表現の割合が談話全体においてどの程度を占めるのかについて検証する。

なお①②の分類法は以下の通りである。

a) 主観直情表現は、接続詞「ダカラ」「ホラ」「ネッ」のような感情を込めた文を交えている場合と、「私モ～」「私ハ～」に類する自己主張と考えられる表現を文に交えている場合とする。

b) 客観説明累加に関わる表現は、順接の接続詞「ソレデ」「ソシテ」類、終助詞「ナー」などを連続的に使用し、接続詞的な役割を持つもの。つまり、談話全体を折りたたむような役割を担っているものとする。なお、ここでは客観説明累加表現とは言わずに客観説明累加に関わる表現とする。なぜならば、客観説明累加は複数の文が集まって初めて「累加する」と言えるからである。

3. 久木田（前掲論文）の東京方言と関西方言の談話資料についての分析

3-1. 東京の言葉（老男 70歳代 浅草の老舗主人）

- ① ダカラ ネ
- ② ミンナ チホーノ シトガ オーインダ ワー。
- ③ ダイタイガ。
- ④ トーキョーノ シトワ イナイデス ヨ。
- ⑤ ダカラ ミンナ ネー。
- ⑥ フツーニ シヤゲッテイルヨーダケド ドコトナク ヤッパリ アクセントガ
チガウ ノネ。
- ⑦ アタシワ キーテテ スグ ワカル。
- ⑧ モー シャジュコゴ ジャ ナイカラ。
- ⑨ モットーモー エドッコッテ ユート スグニ ベランメーッテ コーユークド
モネ。
- ⑩ イマ ベランメーナンテ アンマリ ユワナクナッタ ケドネ。

①だからね。②皆、地方の人が多いのだよ。③大体が。④東京の人はいないですよ。
⑤だから皆ねえ。⑥普通に喋っているようだけれども、どことなく、やっぱりアクセ
ントが違うのね。⑦私は聞いていてすぐ分かる。⑧もう、標準語ではないから。⑨尤
も、江戸っ子と言うとすぐにベランメーってこう言うけどもね。⑩今、ベランメーな
んてあまり言わなくなったけれどもね。

表1 内容	文頭	文中	文末	分類別
①総括	ダカラ		ネ	主観直情表現
②状況説明			ワー	主観直情表現
③状況説明付加				該当なし
④状況説明			ヨ	主観直情表現
⑤総括	ダカラ		ネー	主観直情表現
⑥状況に対する判断			ノネッ	主観直情表現
⑦自己主張	アシタワ		ワカル	主観直情表現
⑧ ⑦の理由			～カラ	主観直情表現
⑨転換、説明付加	モットーモー		～ケドネ	主観直情表現
⑩現状説明	イマ		～ケドネ	主観直情表現

表1の分類別割合

主観直情表現	①②④⑤⑥⑦⑧⑨⑩	9/10	90%
客観説明累加に関わる表現		0/10	0%
該当なし	③	1/10	10%

資料1の談話においては、90%が主観直情表現の展開になっている。東京方言では、全く客観説明累加に関わる表現が見られない。

3-2. 夫が出征した時（老女 明治37年生まれ 当時73歳）

- ① ヘター ソノトキワー ワタシトコ ヒトリデシテ ナー。
- ② ヘター コノ ムスコーガ ロクネンセーデ ソノ イモートガ ゴネンセーデ シデン。
- ③ ヘタラ ソノ コーガ アンタニ ユータ カイナ。
- ④ イーマシタ カ。
- ⑤ ヘタラ ソノ ショーガッコノ セートガ アノー ショーガッコモ チューガッコモ ソノジブンワ アノ コー チューガッコ ア チューガッコヤ ナイ コートヤ。
- ⑥ ユーテ ハッタ シ。

①そしたらその時は（出征は）私の所一人ですてね。②そしたらこの、息子が六年生で、その妹が五年生でしたの。③そしたらその子が、あなたに言ったかねえ。④言いましたか。

⑤そしたらその小学校の生徒が、あのう、小学校も中学校も、その時分はあの、こう中学校、あ、中学校ではない、高等（科）だ。⑥言っておられたの。

表2 内容	文頭	文中	文末	分類
①状況説明	ヘター		ナー	客観説明累加に関わる表現
②状況説明	ヘター		シ	客観説明累加に関わる表現
③状況説明、途中自問	ヘタラ		カイナ	客観説明累加に関わる表現
④質問			カ	主観直情表現
⑤状況説明、途中気づき	ヘタラ	ア	ヤ	客観説明累加に関わる表現と主観直情表現の混合
⑥状況説明			シ	主観直情表現

表2の分類別割合

主観直情表現	④⑥	2/6	33%
客観説明累加に関わる表現	①②③	3/6	50%
客観説明累加に関わる表現 と主観直情表現の混合	⑤	1/6	16%

資料2の談話展開では、50%が客観説明累加に関わる表現になっている。しかし、主観直情表現に類するものも全体の33%ある。関西方言においては、東京方言の談話展開の特徴である主観直情表現も含まれていることがわかる。

4. 四国・九州・沖縄地方における談話展開の分析

4-1. 四国地方

* 四国地方では、徳島県、香川県の例を以下に示す。

資料1 若い衆のころ (男性 徳島県那賀郡延野村雄 1904年生まれ 農業)

- ① ダイタイ ホーユーコトモ アタランデモ ナイワゾー ホリヤー
- ② マー ワシラガ ワカイ ジブンニ イチバン クルイコト シタノワダー
- ③ トナリハタノー シルシガキオ ハズシテ クーテミタリゾー
- ④ バンニ アソビニ イデー
- ⑤ ホレグライン コトカラ
- ⑥ チョイチョイ アルケンドー
- ⑦ ホラケンドー モー コーニンダッタケンノー
- ⑧ オマエガ タベルンダッタラ デ イツ タベテモ カンマン チュー ハズ
ダッタケン
- ⑨ ホー ヨケーモ タベルモンデナイワ モンデモ アレモ。

- ① だいたい そういうことも 当たらないことも ないねえ、そりゃあ。
- ② まあ わしらが 若いころに、いちばん 悪いことを したのはね、
- ③ 近所の つるしがきを はずして 食べてみたりねえ、
- ④ 晩に 遊びに 行って、
- ⑤ それぐらいのことから (まだほかにも)
- ⑥ ちょいちょい あるけれど、
- ⑦ そうだけど、もう 公認だったからねえ。

- ⑧ 「おまえが 食べるのだったら いつ食べても 構わない」ということになって
いたから、
- ⑨ そう たくさんも 食べられるものでもないよ。それでも あれも。

表1 内容	文頭	文中	文末	分類
①所感		ノー	ホリヤー	客観説明累加に関わる表現
②回想	マー		ダー	客観説明累加に関わる表現
③内容説明			ノー	客観説明累加に関わる表現
④回想			テー	客観説明累加に関わる表現
⑤文のつながり			ラー	客観説明累加に関わる表現
⑥所感			ドー	客観説明累加に関わる表現
⑦所感		・ ・ ドー、 モー	ノー	客観説明累加に関わる表現
⑧状況説明				該当なし
⑨経験談	ホー	ホンデモ		客観説明累加に関わる表現

表1の分類別割合

主観直情表現		0/9	0%
客観説明累加に関わる表現	①②③④⑤⑥⑦⑨	8/9	89%
該当なし	⑧	1/9	11%

資料1では、文頭・文中・文末での長音が特徴である。長音が話を展開する上で、畳みかける役割を担っている。久木田（前掲論文）と対照すると、客観説明累加型に類すると考えられる。

資料2 正月前後・こどものころ（香川県三豊郡詫間町大浜肥地木 1905年 農業）

- ① ウララ コドモノ ジブンニヤー
- ② モチオ ツイトンノ
- ③ ヌスンデ デラ カタモチ カブンリョッテ ヨー オンカレヨッタヤナイカ
- ④ デ アノー イモノ シ セーネンノイエ タットル トキヤー
- ⑤ アシコア シモノ タンボヤッタロガイヤー
- ⑥ アノ ジブンニカー コドモノ トキデモ
- ⑦ サー カクレゴー スンニヤッタラー ホ ホトコノエッチ カタモチョ フタツミツ ヌスンデキテヤー
- ⑧ ホトコロエ イレットotte ソー セーネンノイエ マワッテカラニ ヨーオネイ

ラト

- ⑨ ナニ ヒジキジューノ カクレゴ センチューテ
- ⑩ ホー ヒヤノ ハジノ ホーマデ イテ カクレタリ シテ~~シ~~ ヨー
- ⑪ アソビヨッタ。
- ① わたしたちが こどもの ころには、
- ② もちを ついてあるのをねえ
- ③ 盗んで 出て かた（堅）もちを かじっていて よく 叱られていたのではな
いか。
- ④ で いまの 青年の家が 建っている ところおは、
- ⑤ あそこは 下の（家の） 田だったでしょう。
- ⑥ あの ころには、こどもの ときで、もう
- ⑦ さあ かくれんぼを するのだったら、ふところに かたもとを ふたつ みっ
つ 盗んできてね、
- ⑧ ふところに 入れておいて 青年の家を まわってから、よく おまえらと
- ⑨ そら 肥地木中で かくれんぼを しないかと言って
- ⑩ 飛谷の 端の ほうまで 行って かくれたり してねえ、よく
- ⑪ 遊んできました。

表2 内容	文頭	文中	文末	分類
①話の切り出し			ニヤー	客観説明累加に関わる表現
②具体的説明			ノー	客観説明累加に関わる表現
③話者の類推			カ	主観直情表現
④状況説明	デ		キャー	客観説明累加に関わる表現
⑤過去の状況説明			ヤー	客観説明累加に関わる表現
⑥過去の回想			モー	客観説明累加に関わる表現
⑦過去の回想	サー	タラー	ヤー	客観説明累加に関わる表現
⑧過去の回想				該当なし
⑨過去の状況説明				該当なし
⑩過去回想	ホー	ノー		客観説明累加に関わる表現
⑪過去回想				該当なし

表2の分類割合

主観直情表現	③	1/11	9%
客観説明累加に関わる表現	①②④⑤⑥⑦⑩	7/11	64%
該当なし	⑧⑨⑪	3/11	27%

資料2では、文末を長音にして、畳みかけるように話す特徴がある。ここでは、現代語で「～ではないのかなあ」に当たる「カ」を主観直情表現とした。久木田（前掲論文）と対照すると客観説明累加型に類しつつも、主観直情表現を含む特徴的なものだと考えられる。

4-2. 九州地方

* 九州地方では、佐賀県と鹿児島県の例を示す。

資料3 まつりの話（女性 佐賀県佐賀郡久保泉村川久保 1878年生まれ 農業
1954年9月24日 収録）

- ① イッショーケンメ カシェーデ
- ② オソー ヨナベンテ
- ③ コトンメニヤ コモン ツクッテ キセテ ナンター
- ④ ソーシテ モー ホント マツイ マエーシテ ムギモ ミヤーテ
- ⑤ シマワンナン テユーゴタフーデ カシュギヨッダテ
- ⑥ イマジブンノ シッサンタチャー
- ⑦ モー マツイマエチャーローガ ナイチャーローガ モー アッケー
- ⑧ アケントケント アー シテヨー ケッコーナ モンタンター

- ① 一生懸命 働いて、
- ② 遅くまで 夜業して、
- ③ こどもらには 着物を 作って 着せて あなた、
- ④ そして もう ほんとに おまつりを 前にして 麦も まいて
- ⑤ しまわなければならない というようなふうで 働いたものです。
- ⑥ このごろの 人たちは
- ⑦ もう まつり前であろうが なかろうが、もう
- ⑧ のんびり して 結構な ことだよ、あなた

表3 内容	文頭	文中	文末	分類
①状況説明			～デ	客観説明累加に関わる表現
②状況説明			～シテ	客観説明累加に関わる表現
③状況説明			ナンター	主観直情表現
④状況説明	ソーシテ	モー	～テ	客観説明累加に関わる表現
⑤過去の状況説明		～デ	～ヨタ	客観説明累加に関わる表現
⑥過去と現在の比較	イマジブンノー		～チャー	客観説明累加に関わる表現
⑦状況説明	モー	～ガ、	アッケー	客観説明累加に関わる表現
⑧所感			～ター	客観説明累加に関わる表現

資料3の分類別割合

主観直情表現	③	1/8	12.5%
客観説明累加に関わる表現	①②④⑤⑥⑦⑧	7/8	87.5%

資料3の話者は、主観直情表現を含むものの、客観説明累加に関わる表現による話の展開法をしている。文末表現の「デ」「シテ」「テ」類が使用されていて、話を続ける流れを作っている。また、③の「ナンター」は「あなた」の意味であり、話し手に対して同意を求め、かつ久木田（前掲論文）より、主観直情型に類する表現だと考えた。話の流れとしては、客観説明累加型に類するのではないかと考えられる。

資料4 さかな売りの話（女性 鹿児島県鹿児島市 1894年生まれ 無職 1954年
8月27日 収録）

- ① モ ムカッノ シヤ ユ ネギーヤッモン ゴアンガナーア
- ② モ ヤドン アイ オトツツアツズイ ヤッパイ ネ
- ③ ソン クセヤ トレモハンシタド
- ④ モ モノン アイ ユッタトゥ ユタ ネデ メズラシ コアン ヒト
- ⑤ ツイデ ヤドン ムスコナンドガ
- ⑥ モー オトーサントナ イツツジャイ ドコイジャ イカン スタイ
- ⑦ ドケ イテン ネギツセー
- ⑧ モ メップツガネデ テノンジャ イカン
- ⑨ キョネンズヤ ソエシ イヨシタ (ド)
- ⑩ モ オトサント イカンチ

- ① 昔の人はよく値切るもので ございますねえ。
- ② うちの亭主たちまで やはり ねえ、
- ③ そのくせは とれませんでしたよ。
- ④ 物売りが 言ったとおりの、言った値では よくもまあ 買わない 人(でした)。
- ⑤ それで うちの むすこなどは
- ⑥ 「もう おとうさんとは どんなときでも どこへも 行かない、本当に。
- ⑦ どこに 行っても 値切って、
- ⑧ もう 面目がないので 連れだつては 行かない」と、
- ⑨ 昨年中は そのように 言っていましたよ、
- ⑩ 「もう おとうさんと (は) 行かない」と。

表4 内容	文頭	文中	文末	分類
①所感			～ガナーア	客観説明累加に関する表現
②具体的説明	モ		ネ	主観直情表現
③事実説明			～ド	主観直情表現
④事実説明				該当なし
⑤状況説明	ソイデ			客観説明累加に関する表現
⑥会話部分			スツタイ	該当なし
⑦状況説明			～セー	客観説明累加に関する表現
⑧理由説明	モ		～ネデ	客観説明累加に関する表現
⑨状況説明		ソエン	(ド)	主観直情表現
⑩会話部分			～チ	該当なし

資料4の分類割合

主観直情表現	②③⑨	3/10	30%
客観説明累加に関わる表現	①⑤⑦⑧	4/10	40%
該当なし	④⑥⑩	3/10	30%

資料4の話者は、主観直情表現、客観説明累加に関する表現、のどちらも含んだ話の展開をしている。主観直情表現の中には「ねえ」の意味の「ネ」、「～よ」の意味の「ド」、が使用されている。客観説明累加に関する表現では、「それで」の意味で「ソイデ」の使用等が見受けられる。主観直情表現と客観説明累加に関する表現の混合は

見られない。久木田（前掲論文）と比較して、主観直情型と客観説明累加型の両方の要素を持つ特殊な型であると考えられる。

4-3. 沖縄地方

資料5 73歳のお祝いとごちそう（男性 那覇市首里 公使 1891年生まれ）

- ① それから そして 73歳の
- ② まあ お祝いには 何でしょうか
- ③ この以前は
- ④ ええ お年寄りには
- ⑤ まあ みな 盛装して おすわりになって
- ⑥ そうして、みな
- ⑦ あの そんな こどもたち 孫たちが
- ⑧ あの お客さんを みな 接待をしますが
- ⑨ 何でしょうか
- ⑩ この そのときの
- ⑪ この あの ご馳走は
- ⑫ これは 何でしょうか
- ⑬ ええ
- ⑭ あの それも
- ⑮ なにに 出すとって
- ⑯ だいたい それにきまっていますね
- ⑰ まず きかせて 下さい。

表5 内容	文頭	文中	文末	分類別割合
①話の切り出し	ンウリカラ	ンアンシ		客観説明累加に関する表現
②相手へのなげかけ	ナー			客観説明累加に関する表現
③状況説明				該当なし
④状況説明	エー			客観説明累加に関する表現
⑤状況説明	ナー			客観説明累加に関する表現
⑥状況説明	ンアンシ			客観説明累加に関する表現
⑦状況説明	ンアンヌ			客観説明累加に関する表現

⑧状況説明	ンアヌ			客観説明累加に関する表現
⑨相手へのなげかけ				該当なし
⑩話題提示への切り出し	クヌ	ンウンニース		客観説明累加に関する表現
⑪話題提示	クヌ			客観説明累加に関する表現
⑫相手へのなげかけ	クレー			客観説明累加に関する表現
⑬うなずき	エー			客観説明累加に関する表現
⑭話の切り出し	アヌー	ンウリン		客観説明累加に関する表現
⑮内容説明				該当なし
⑯所感			ジャー	客観説明累加に関する表現
⑰文の結び				該当なし

資料5の分類割合

主観直情表現			0.0%
客観説明累加に関わる表現	①②④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑫ ⑬⑭⑮⑯	13/16	81.2%
該当なし	③④⑮	3/16	18.8%

資料5では、客観説明累加に関する表現が8割以上で、主観直情表現が使用されていないことがわかる。ゆえに、久木田（前掲論文）と比較して客観説明累加型に類すると考えられる。

5. 分析結果

県名	主観直情表現	客観説明累加に関する表現	主観と客観の混合	該当なし
徳島県	0	89	0	11
香川県	9	64	0	27
愛媛県	0	85	0	15
高知県	0	83	0	17
福岡県	0	90	10	0
佐賀県	12.5	87.5	0	0
長崎県	0	90	10	0
熊本県	0	100	0	0

大分県	0	87.5	0	12.5
宮崎県	0	100	0	0
鹿児島県	30	40	0	30
沖縄県	0	81.2	0	18.8

6. 結論

①久木田（前掲論文）に見られる東京方言（主観直情型）と関西方言（客観説明累加型）の割合において、東京方言は談話全体の8割以上主観直情表現の展開であり、客観説明累加に関する表現がとられていないことがわかる。また、関西方言では、談話の中に客観説明累加に関する表現の展開が一部とられているものから8割以上とられているものまで様々であり、談話に占める客観説明累加に関する表現の割合は個人差や地域差があると考えられる。関西方言は、東京方言の特徴である主観直情表現を含むものも多いことがわかった。ただし、関西方言では主観直情表現よりも客観説明累加に関する表現の割合の方が高くなっている。

②四国・九州・沖縄地方の方言談話を分析した結果は次の通りである。客観説明累加に関する表現が主観直情表現より多くの割合を占める地域は九州地方西部に集中して見られる。

九州西部では、室町時代以降に守護から戦国大名になった例外地域（豊後の大友氏、薩摩の島津氏、対馬の宗氏）（大和田1978）においては主観直情表現が見られる。しかし、主観直情型の浸透が浅く、客観説明累加型が根付いている。主観直情表現が九州全域に広がらなかった理由として九州山地など地理的な要因があったと考えられる。また、四国地方、九州東部、沖縄地方では客観説明累加に関する表現が多くの割合を占める中で、主観直情表現を含んでいないことがわかる。ただし、香川県では主観直情表現も含まれている。これは、香川県が関西方言（客観説明累加型）の中心である大阪府、兵庫県に隣接しているため、関西方言（客観説明累加型）の影響を受けていると考えられる。

(注)

この主観直情表現の占めるパーセンテージは、談話展開研究にはじめて計量的視点を導入した齋藤他（2000）の中で齋藤が提唱した「主観性得点」と「モダリティ得点」のうち「モダリティ得点」に概当するものである。筆者と齋藤の分析法の違いは、齋藤の「主観性得点」の視点が「主観直情表

現」対「非主観直情表現」という2分法的なとらえ方をするのに対し、筆者は基本的に「主観直情表現」「客観説明累加に関わる表現」「該当なし」の3分法的なとらえ方をする点にある。なお、本稿では、その目的から「モダリティ得点」に関わる要素は抜かない。

参考文献

- 日本放送協会編 1981『カセットテープ 全国方言資料 第六巻 四国地方編』出版協会
日本放送協会編 1981『カセットテープ 全国方言資料 第七巻 九州地方編』出版協会
大和田哲男 1978『戦国大名』教育社
久木田 恵 1990「東京方言の説話展開の方法」『国語学』162
齋藤孝滋編 1999『地域言語調査研究法』おうふう
齋藤孝滋・奈良夕里枝・晋萍・伊藤孝浩・フェリス女学院大学地域言語調査会 2000「共通語使用の
談話展開と言語形成期獲得方言の影響」『日本方言研究会第71回原稿集』
南 不二男 1984『講座言語 第三巻 言語と行動』大修館書店
グロータース, W. A 1976『日本の方言地理学のために』平凡社
柴田 武 1969『言語地理学の方法』筑摩書房
小林 隆 2002「日本語方言の歴史」『朝倉日本語講座10巻』第12章 朝倉書店

(2003年 卒業)